

2022. 10. 22 (日) 使徒5:12~16

5:12 さて、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた。皆は心一つにしてソロモンの回廊にいた。

5:13 ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していた。

5:14 そして、主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。

5:15 そしてついには、病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせて、ペテロが通りかかるときには、せめてその影だけでも、病人のだれかにかかるようにするほどになった。

5:16 また、エルサレム付近の町々から大勢の人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人々を連れて集まって来た。その人々はみな癒やされた。

<説教>

本日の箇所に記載されているような初代教会の姿は、もう既に2章43節~や4章32節~にも記されていました。そんな同じようなことが何故また書かれているのでしょうか。考えられることの第一は、ダヤ人の最高法院（サンヘドリン）の迫害にもかかわらず、またアナニヤとサツピラの事件があったにもかかわらず（またはむしろアナニヤとサツピラの事件があったが故に）教会は前進して行ったということです。もちろんそれは「神がすべてのことを働かせて益としてしてくださった」（ローマ 8:28）からに他なりません。そして第二には17節以降に記載されている次なる迫害、事件の「切っ掛け」としてです。

エルサレムの神殿の美しい門の所で、生まれつき足の不自由な人がイエス・キリストの名によって癒やされました（使徒ペテロがそのために用いられました）。その出来事に驚いた人々が神殿の「ソロモンの回廊」と呼ばれる場所にいた使徒ペテロとヨハネのところに駆け寄って来ました。その彼らに対してペテロが説教し、ナザレのイエスこそ約束のキリストであると証しし、イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えました。そのことに苛立ったサドカイ人たちが二人を捕らえて、サンヘドリンで尋問し、もうこれ以上使徒たちの教えが人々の間に広まらないように、今後だれにもイエス・キリストの名によって語ってはならないと二人に命じ脅しました。しかし二人は「神に従うよりも、あなたがたに従う方が、神の御前に正しいかどうか判断してください。私たちは、自分たちが見たことや聞いたことを話さないわけにはいきません。」と言って、サンヘドリンの命令を拒否し、脅しに負けませんでした。釈放された二人は仲間のところに行き、報告すると、人々は心一つにして神に祈りました。「主よ。今、彼らの脅かしをご覧になって、しもべたちにあなたのみことばを大胆に語らせてください。また、御手を伸ばし、あなたの聖なるしもべイエスの名によって、癒やしとしるしと不思議を行わせてください。」と。

ですから、迫害を切っ掛けとして、教会が心一つにして神に捧げた祈りに神が真実に応えてくださった故に、〈使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた〉(5:12a)のです。そして〈皆は心一つにしてソロモンの回廊にいた〉(5:12b)、これも考えてみればすごい大胆不敵なことです。何故なら、既に見たように、最初に使徒ペテロとヨハネが捕らえられた場所がソロモンの回廊だったからです。そしてそこは神殿の

中でしたから当然、彼らを捕らえ脅し迫害したサンヘドリンもまたすぐ近くにあったわけです。そんなところに相変わらず〈皆は心をつにして〉集まっていた。彼らは復活の主イエス・キリストを信じる信仰の心で一つでした。また、権力者たちサンヘドリンの脅し迫害をご覧になっておられて語るべきみことばを大胆に語らせ、為すべきわざを行わせてくださる父なる神に祈る信仰の心で一つでした。そして御父と御子イエス・キリストが天から送ってくださる聖霊に満たされた信仰の心で一つでした。信仰のいわゆる強い弱いの違いはあったでしょうが、それならなおさらその信仰を神の〈大きな恵み〉として〈自分のものと言わず〉〈共有していた〉のです。それ故、迫害の危険をも〈共有〉し、集まる場所をも〈共有〉して〈ソロモンの回廊にいた〉のです。

〈ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していた。そして、主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。〉(5:13,14) アナニヤとサツピラ夫婦の罪とそのさばきについては、〈教会全体と、このことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた〉(11)のでした。教会外の人々も〈このことを聞いた〉のでしょう。教会という所は自分たちの仲間の罪をも正しく所だ、偽善や見せ掛けは通用しない所だ、と世の〈ほかの人たち〉は知りました。当時も金についてのごまかし、不正はこの世では自分の、また仲間内の、そして組織の利益のためには当然のことだったでしょう。「うそも方便」だったでしょう。しかしそれは人を欺くのではなく神を欺くことだという教会の「きよさ」に人々は内心打たれたのでしょう。一方では「そんなきれいな事では世の中やっていけない」との思いをいだきつつ…。また「信仰者なんかになったら世の中で生きていけない」と考えた人もいたでしょう。それでさすがに今は信仰者となって教会の仲間に入ろうという思いにはなれないという人も相当数いたでしょう。それでも良心に訴えるならどちらが本当は正しいのかは明らかでした。それで〈民は彼らを尊敬していた〉のです。もし教会がアナニヤとサツピラからの反発を恐れ、また世の人々からの反発(「それは厳しすぎる」「そんなことは普通のことだ」「そんなことなら信仰者になんかなりたくない」「教会の仲間になんかなりたくない」等)を恐れて正しい処置をとらなかつたら、いったいどういうことになっていたか…。決して人々の尊敬を得ることはできなかったでしょう。いや何よりも神の祝福を失うことになったに違いありません。しかし教会が〈神の御前に正し〉く考え行つたので、アナニヤという〈男〉とサツピラという〈女〉は失いましたが、〈男も女も〉〈主を信じる者たちはますます増えた〉のです。〈私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。〉(Ⅱコリント 2:15,16a)

5:15,16 に記されていることは、先にも見たとおり(4:30)、神への祈りの応えとしての神のみわざ、主イエス・キリストのみわざです。ちょうどかつて主イエスが地上におられてみわざをなさっていたときと同じような事になったのですから(cf. マタイ 14:35,36。マルコ 1:32-34。6:55,56。等々)。〈しるし〉とは、「イエスが復活なされ、今も生きて働いておられる」ということの〈証拠としての奇跡〉(欄外注)に他ならないのです。

私たちが初代教会の人々と同じように、いっそう主イエス・キリストを信じる信仰の一致をもって、神の御前に正しいことが何かを追い求め、行い、主イエス・キリストを証していきたいと願い祈ります。

